

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アーミッシュを訪ねて 5 : フォークアートとキルト

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5808

フオークアートとキルト

鈴木七美

(すずき ななみ)

アーミツシュ・コミュニティには鑑賞用の美術品はなく、おしゃれなドレスや贅沢品を誇ることはタブーとなっている。しかし、彼らは生活の中で美的センスを発揮している。勤勉に働くことに価値を見出しているアーミツシュにとって、実用品を丹念に手作りし仕上げることは望ましい活動のひとつとされる。がっしりとした素朴なつくりで丁寧に仕上げられたテーブルや椅子、戸棚などの家具、色とりどりに彩色された陶磁器、絵が描かれたカレンダーなど、実用的なものの中に、作った人の美的感覚が心弾むような楽しさとともに表現されている。いわば「民芸の美」の中に彼らの美的センスが生き生きと躍動しているのであ

る。

今回は、アーミツシュの生活の中に息づく美、なかでもとりわけそれが特徴的にあらわれたキルトを中心にご紹介したい。

● アートとエスニック・アイデンティティ

この連載の第一回で、アーミツシュ自体にもさまざまな宗派があつて多様性をはらんでいることに触れた。いずれの宗派もシンプルな生活を共通の信条としているものの、そこで手作りされる実用品にはこの宗派による多様性が反映されている。



オールド・オーダー・アーミツシュの
Samさんのお店

例えば、ペンシルヴェニア・ダッチに伝統として伝わる装飾彩色画 (Traktur) には、鳩、薔薇、ハート、生命の木、クジャクなどのモチーフがあり、それらが手書きのカード、家族の記録、刺繍を飾っている。アーミツシュの手になるものは多くはないが、これらのモチーフには宗派によつてさまざまなバリエーションがある。また、バークス、リーハイなどのペンシルヴェニア各郡では、幾何学的なデザインの「ヘックス・サイン (hex signs)」が納屋に描かれている。これらはアーミツシュには認められていないが、魔女や悪魔の侵入を防ぐためとも説明されており、近年ではペンシルヴェニア・ダッチとしてのエスニック・アイデンティティを表現する役割が目ざされている。

このエスニック・アイデンティティをめぐることは痛切な歴史がある。一八六一年に始まった南北戦争によつて、ペンシルヴェニア・ダッチは幾重にもからまった難題に向き合うことになった。アーミツシュなど「プレーン (Plain)・セクト」は戦争反対主義を貫くか否かの決断を迫られた。やむなく戦争に参加する者たちは北軍に加わり、南軍とりわけヴァージニアのドイツ系の人々と戦いを交えなければならないという現実を直面した。また同時期

にペンシルヴェニア州ではスクール・システムの統合促進が進められ、ドイツ語などペンシルヴェニア・ダッチの特徴的文化の保持に関し危機意識が高まった。

こうした状況に対し、ペンシルヴェニア・ダッチを構成する多様なグループがそれぞれのアイデンティティを求めて対応した。現在プレーン・セクトのイメージともなっているシンプルな服装はこの時期に「ユニフォーム化」した。ヘックス・サインが精力的に納屋に描かれ始めたのもこの時期である。ペンシルヴェニア・ダッチの住居であることを表すためそこにヘックス・サインのモチーフが加えられた。それらはまさに「エスニシティ・マーカー」として機能したのである。キルトやかぎ針編みなどで作った敷物もアメリカの他の人々と共有の文化の一つだが、アーミツシュの特徴的なデザインと認識された後はエスニシティを表現するものとして継承され、さらにコミュニティごとの特徴をもデザインや色で表現してきたといえよう。

●アーミツシュ・キルトの登場

キルトは、紀元前のエジプト、中国そしてインドにもみられた。十字軍によつてイギリスにもたらされて武器とし

て用いられ、十四世紀の大寒波の時に保温性が注目され衣服や寝具にも取り入れられた。ヨーロッパではキルトとパツチワークは別々に行われる傾向が強く、二つを合わせたキルトとして定着したのはアメリカでのことだという。

アーミッシュに特徴的なキルトがさかんに作られたのは、一八〇〇年代後期から一九四〇年頃までである。一八〇〇年代後期には、ペンシルヴェニア、オハイオ、インディアナなどのアーミッシュ・コミュニティが安定し、暮らしに余裕がもてるようになっていた。その時代につくられたキルトは無地の布だけを用いているが、くっきりとした配色で幾何学的模様が浮かび上がっている。古いタイプのキルトには服を作った布の端切れが使われており、綿やウールがほとんどだ。自分で糸を紡いで織り染めた布は端切れとなっても大切だ。色はアーミッシュの服と同様濃青、緑、紫、茶や深い赤色で、濃紺など暗い色の布をベースとして強いコントラストが生まれている。色などに関してきまりは明文化されてはいないが、コミュニティごとに好みは示されており、どのコミュニティでも一般に白や明るい黄色は好まれなかったという。

●キルトの色とパターン

アーミッシュのキルト作りで知られるランカスターでは、三つのパターンが伝統的なデザインとして知られている。

真ん中に大きな単色のダイヤ形の布を配し、二重の縁で囲んだ幾何学的模様のキルトは、「セクター・ダイヤモンド」(ダイヤモンド・イン・スクエア)とよばれる。直線的な強い感じと縁のキルティングの緩やかなカーブがパランスよく配されている。アーミッシュの女性たちからしばしば「Cape quilt」と親しまれている。服とは違ってほころびず長持ちする三角形のケープの布を、キルトのコーナーに再利用するからだ。大きくカットされた二色から三色の布でつくられるボーダー柄のシンブルなキルト「バーズ(Bars)」は、納屋の扉や窓、まっすぐに伸びる長い道などをモチーフにしているとされる。古くからアーミッシュに好まれたデザイン、「サンシャイン・アンド・シャドウ」は、四角い布をダイヤモンド形に縫い合わせた光と影の効果で見るものを惹きつける。青、栗色、ピンク、深緑、紫、藤紫そして黒色の帯が、幅の広い暗色の縁に囲まれ際

立っている。これらは質のよいウールでふつくらと作られることが多かった。ランカスターのキルトは、縁の幅が広く角のブロックも大きめだ。シンブルな図柄の広いスペースを同色の糸あるいは黒糸で模様を描きながらキルトイングするのが特徴で、ステッチの細かさや規則正しさができあがりに影響する。

場所やコミュニティの違いはキルトにも反映されている。ペンシルヴェニアのミフリン郡では、色もパターンもランカスターとは違っている。色はコミュニティの厳格さによっても異なるが、落ち着いたブルー、紫、茶などのみが使われる所もあり、華やかなピンク、明るい黄色、鮮やかなブルーが配されるところもある。パターンは多様だが、どれも、フォー・パッチ (Four-Patch) かナイン・パッチ (Nine-Patch) のデザインを基本としている。緑はランカスターのものよりも狭くキルトイングのパターンも少なめだ。

オハイオ州やインディアナ州など中西部に定住したアーミッシュのキルトにはより多くの色や布の種類が取り入れられ、東部から移動する過程で周囲の文化と接する機会が多かったことがうかがわれる。とはいえ無色の布を黒や濃

い青の中に浮かび上がらせる手法は守られている。キルトイングのモチーフは綱、花、扇形、直線などが多い。

●キルトイング・ビーと女たち

アーミッシュの女性たちは、小さい頃から縫い物を教えられ手縫いや足踏みミシンで服やキルトを縫う。結婚する子供たちのためやマーケットに供給するためキルトをつくることは、アーミッシュの女性たちにとって、社会的・経済的にも重要な活動となっている。キルト作りも、料理と同様女性の領域とされ、アーミッシュの人々の性別役割分担が明確に表現されている。

バーン・レイジングや収穫などと同様に、キルトイングは、普通家族や近所の女性たちが集まって行う。「ソーイング・ビー」あるいは「キルトイング・ビー (quilting bee)」とよばれるこの集まりでは、三層の布を大きなフレームにはめ込んでそれを囲んで座り、話をしながら一針縫っていく。現在ではこうして作られたアーミッシュ・キルトを蒐集することを楽しみにしている人たちもいる。だがアーミッシュ・メノナイトのエイダさんによると、キルト作りの一番の目的はやはり「家族や友人など大

切な人へ贈ること」だという。彼女はほとんど毎日キルトを作るという。キルトは親から子へ、そして孫へと受け継がれるものでもある。結婚する娘に多くの母親は少なくとも四から六枚くらいのキルトをプレゼントする。

●アーミツシュ・キルトの変容とその新しい役割

現在アーミツシュ・キルトはいつの時代よりも多く作られている。キルトといえばアーミツシュといわれるほどアイデンティティを表現するものとなっており、商品としても人気があるからだ。二〇世紀前半生まれの女性たちへのインタヴューによると、世紀半ばには今ほど多くのキルトを作らなかつたと、このブームに驚きを示しているそうだ。

だが最近のアーミツシュ・キルトは、伝統的なものと比較するとその特徴は薄れているといえよう。キルトには、明るい赤、オレンジ、黄色など服には用いられない色も登場する。行商人が様々な色の布のセットを持つてくるので、布束はどれも捨て難いという理由から、キルトに少しずつ新しい色を加えられたという。また、服は無地だがキルトにはプリント地も使われるようになった。二〇世紀初

頭にアメリカでレーヨンが使われるようになり、一九四〇年代には、ポリエステルやアクリルが多く出回るようになった。できあがりの雰囲気はコットンやウールとは大きな違いだ。キルティングのステッチは少なめになり、初期のものに比べると精妙には見えない。中で動く心配のないポリエステル製の詰め物を使うようになったこと、売るために作られていることも一因だ。

キルトを販売するようになったことは、アーミツシュ・キルト作りに大きな影響を与えた。家に余っていた端切れに少し新しい布を加えて作るのではなく、パターンや色を決めてから布を買う。一般の人々が好むようなカラー・コーディネートを目指して色が選ばれるようになってきた。精妙な古いアーミツシュ・キルトももちろん、よくデザインされ縫い合わされている。だがそれはカラー・セオリーなどに縛られない自由なコーディネートだったのだ。統一性を目指さずに自由に表現する場、それこそがアーミツシュ・キルトの魅力の一つでもあっただろう。

また逆に、伝統的なキルトを再現しようという動きもある。アーミツシュ・キルトのコレクターにとくに人気が高いのは、一九世紀の後半から二〇世紀の前半までに作られ

たものが多いことも一因であろう。前述の三つのシンプルな伝統的パターンは、最近ではアーミッシュ以外の人々が壁掛けなどの飾りとして好んで用いている。その大胆なデザインと色使いがモダンだと感じさせるようだ。

これら二種の方向性を示しているアーミッシュのキルトだが、毎年夏に各地で行われるオークションでは、救援募金のための重要なアイテムとなっている。オークションには、アーミッシュ・キルトをアートとして求めるコレクター



アーミッシュ・ファーム・アンド・ハウス（上）キルトを見る学生
（前）女性服とキルトのベッド・カバー

ーたちも集まる。売り上げはメノナイト・セントラル・コミッテイ（MCC）を通じて世界中の災害地、紛争地への基金として使われる。MCCは世界各地に伝道の根拠地をもつメノナイトの共同組織だ。MCCの一部、メノナイト・デイズター・サーヴィス（MDS）は災害に襲われた人々の生活復興を援助している。

変わりつつあるアーミッシュ・キルトだが、フォーク・アートとして、また世界各地への援助活動の一環として、外の社会とアーミッシュを繋ぐ新しい役割も果たしつつあるのだ。

【参考文献】

- Granick, E.W., *The Amish Quilt*, Good Books, 1989
Hostetter, J.A., *The Amish*, Herald Press, 1995
Pelman, Rachel & Pelman, Kenneth, *A Treasury of Amish Quilts*, Good Books, 1998 (1990)
Pelman, Rachel T. & Ranck, Joanne, *Quilts among the Plain People*, Good Books, 1981
Yoder, Don. & Graves, Thomas E., *Hex Signs*, Stackpole Books, 2000
菅原千代志『アーミッシュ・キルトと畑の猫』丸善ブックス、2001年

（京都文教大学／歴史人類学・医療人類学・北米文化学）